

アナログディスク再生前の諸問題

1 レコードプレーヤー+トーンアームが要求するオーバーハングを実現出来ない

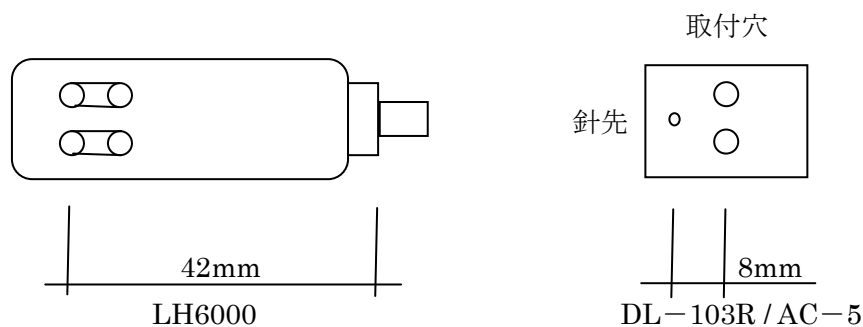
例えば、当社の場合、DENON の DP-A100 というプレーヤーを使用します。

プレーヤーの有効アーム長は 244mm で、アームとヘッドシェルの接触面から針先までは 54mm という指定があります（厳密には針圧が掛かった状態で）。

この「54mm」が難関です。

ヘッドシェルは、これに組合せるカートリッジの重量を加えて、アームのカウンターウェイトとバランスをとる必要があります（DP-A100 の場合は 22~28g）。

ヘッドシェルのデザインも大切な要素ですから、ortofon の LH6000 というヘッドシェルを選んでいますが、これだと DENON の DL-103R、Accuphase の AC-5 の場合は 50mm、ortofon の Windfeld では 52mm になってしまいます。



2mm の不足はともかく、4mm の不足というのは問題かもしれません。

通常、ヘッドシェルの仕様に重量については明記されていますが、アームとの取付面からカートリッジを取付ける穴の先端（取付ネジのセンター）までの距離（長さ）は記載されていません。

また、オーバーハングだけを考えれば、DP-A100 に付属するヘッドシェルを使用すればいいと思いましたが、残念ながらサービスパーツとして別途入手は出来ません。加えて、このヘッドシェルは重過ぎて(18g)、AC-5、Windfeld では重量バランスがとれません。

オーバーハングが不足しても、一応音は出るでしょう。
そもそもアームは回転運動をしますので、針先の方向はレコードの溝（円周方向）に対する接線方向から盤面上の大部分のところで傾いてしまいます。

オーバーハングについてはあまり気にしてもしょうがないかもしれません。

2 トーンアームのカウンターウェイトが要求する重量範囲を守ることも難しい

例えば、ortofon のヘッドシェル LH6000 の場合、取付ネジ込みで重量は 14.6g です。随分細かい表現ですね。

このヘッドシェルには細いリード線が付属していますが、その重量は「織り込み済み」のようです。

DENON DL-103R、アキュフェーズ AC-5 では重量バランスの問題は起こりませんでした。

しかし、ortofon Windfeld の場合、この細いリード線を使用した場合でも、実測値は 29.7g になってしまいました。1.7g の重量オーバーです（DP-A100 の場合、22～28g という規定があります）。

計算上は $13.0\text{g}(\text{Windfeld}) + 14.6\text{g}(\text{LH6000}) = 27.6\text{g}$ ですが・・・。

おまけに、Windfeld には太いリード線が付属して（通常「リード線」はカートリッジではなくヘッドシェルに付属しているようです）、これを使用すると、更に 0.5g 重くなり、総重量は 30.3g となります。

Windfeld の針圧は 2.6g なので、最悪の場合は $28\text{g} + 2.6\text{g} - 30.3\text{g} = 0.3\text{g}$ で、針圧を 0.3g にすればいいじゃないかという考え方も成立するかもしれません。

しかし、カウンターウェイト側にはある程度の余裕があり、この 2.3g の重量オーバーは何とか吸収出来るかもしれません。

3 レコードの厚さが違う

レコードについては、よく「重量盤が良い」という話を耳にします。

重量盤の方がレコードが反りにくいからでしょうか。

しかし、重量が重いということはレコード盤が厚くなるということです。

細かくいうと、レコードの厚さに合わせてアームの高さを調整し、アームの水平を確保しなければなりません。

このように、アナログ・ディスクの再生では、音楽 CD の再生では起こらない問題が幾つも見られます。

アナログ・ディスク再生にまつわる宿命ともいえる問題もありますし、単に手間暇がかかるだけという問題もあります。

実際にやってみなければ分からないことも多く、これこそ「アナログ的」といえるのかもしれないですね。

以上